

第四十八回現代短歌大賞授賞式報告

永田 淳

二〇二五年十二月十八日(木)、東京のアルカディア市ヶ谷において、二〇二五年度臨時総会、現代短歌大賞授賞式、新入会員の紹介および忘年会が開かれた。ここで忘年会が行われるのは今年で二回目であるが、学士会館を懐かしむ

現代歌人協会会報 186

声もちらほら聞かれた。

司会は田中拓也。会の冒頭、坂井修一新理事長より協会のコンプライアンスについて、主にはハラメント防止、著作権保護、個人情報保護の保護、その他表現の自由の確保、AIといかに共存するか、歌人の地位向上に会員の協力と支援をお願いしたいと挨拶があった。引き続き総会へと移り、会則により坂井理事長が議長となる旨が伝えられ、司会より委任状の提出と総会出席者の総計により、定足数に達していることが報告さ

れ、総会は成立することが告げられた。

坂井議長からは今年度の事業報告が行われた。主には全六回にわたって行われた公開講座「協会賞歌集を読み返す3」、第五十四回全国短歌大会の開催、そして次回六月の定期総会にて定款の改正を提案することなどが報告された。

その後、現代短歌大賞の選考経過が述べられた。委員の内藤明、小島ゆかり、吉川宏志、坂井修一の四名にて選考が行われ、満場一致で志垣澄幸歌集『雁喰』を推挙することが早々に決まったことが報告された。例年なら紛糾することもあるが、今年は思いのほかすんなりと決まったとのことである。これを理事会に上程し、理事会にて承認されて第四十八回現代短歌大賞が『雁喰』に決定されたことが報告された。

引き続き坂井議長より志垣の歌の特徴などが紹介された。受賞時九十一歳の志垣は前衛短歌の影響をまともにも受けた世代ながら、前衛に走るのではなく前衛とリアリズムを融合させた、と指摘。宮崎の自然、風土、特に海がモチー

フとして作品に底流していること。前衛短歌に対してのレヴィジヨニスト、後衛であることなどが述べられた。具体的には初期の作品「砂浜に打ちあげられし紅き藻がしばらく照りて海に還れり」

〔空壇のある風景〕や「透きとほる稚魚のいのちはまぎれつつ夜の水槽に眼のみ群れなす」〔星霜〕などを引き合いに海や水に親しいことが紹介された。また『雁喰』から「海底を這ひたる網が春の雲透かして浜辺に吊るされてをり」を紹介し、「海のものゝがざわめいたり風いだりを見つめる作者の精神の在処が熟した形」「表現の緻密さ、紛れなき、大らかさ」が魅力であると語られた。続いて選考委員である吉川から祝辞があり、



他の大賞受賞者は若い頃から何らかの受賞歴があるが志垣のように齢を重ねてからの受賞は珍しいと指摘。そして「秋のひかり揉み込みながら流れゆく川の面を車窓にみたり」を引用し、普通なら「光を乗せて」などと詠うところを「揉み込む」と少しずらした動詞を使うことで、世界の見え方を変える力があると指摘。また「戦争あらば隠るるにき里山の岩の裂け目をみつけてきたり」を紹介しながら、戦争体験者ならではの視点と現代への危機感を表出していることにも言及した。最後に志垣が吉川の高校時代の恩師であることを紹介し、志垣がいなければ自分は歌を作っていなかっただろう、と涙ぐむ場面もあった。この後、同じ宮崎から駆けつけた大口玲子から記念品が、そして協会からの花束が佐藤弓生から贈られた。

その後志垣から、これからは賞に恥じない、深い歌を作っていきたい、受賞に勇気をもらったのであと数年は元気に生きていい歌を作り続けたいと挨拶があった。

授賞式終了後に忘年会となり、久保田登による乾杯。宴も半ばの頃に新入会員の紹介があり、出席者が壇上にあがり記念撮影。「潮音」の奥田洋子、「未来」の堀隆博、「心の花」の清水あかねが挨拶に立った。

八時半に大松達知より締めめの挨拶があり忘年会はお開きとなった。